

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 26 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520093

研究課題名（和文） ファシスト・モダニズムにおける政治と美学の相互浸透に関する研究

研究課題名（英文） The relation between politics and aesthetics in 'fascist Modernism'

研究代表者

石田 圭子 (ISHIDA KEIKO)

東京芸術大学・美術学部・講師

研究者番号：40529947

研究成果の概要（和文）：ファシズムとモダニズムにおける美学と政治の親和性と連関について調査と分析を行い、以下の成果を得た。(1)神話や形姿(Gestalt)としての「形式」いう観点から両者の連関を明らかにした。(2) (1)の結果として、新たなモダニズム像を示すことができた。(3) 本研究の成果を学会発表や著書・論文という具体的成果として公表した。(4) 現代における美と政治との関係について考察する手掛かりを得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The following are the results of this research project : (1) That 'myth' and the 'form' as 'Gestalt' played a significant role on the relation and the affinity between fascism and Modernism could be pointed out. (2) As a result of (1), another face of modernism could be presented. (3) Several results were presented at the conferences and several were published in some journals and books. (4) An insight to the relation between aesthetics and politics of nowadays could be acquired.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2011年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| 2012年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美学

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内外の研究の動向

近年、政治と美学の連関について考察する研究が少しずつ現われるようになってきている。しかしながら、それら研究の多くは、政治関与に関する個別的事実の発見と解釈や内容面での分析に終始しており、ファシズムとモダニズムの間の原理的な繋がりについて考察する研究は見られなかった。また、ファシ

ムの美学的思想に関する研究は不十分であった。

(2) 本研究の位置づけ

本研究はファシスト・モダニストの言説・作品およびファシズムのイデオロギーの言説を研究し、両者の思想・美学の相互浸透について明らかにすることを目指すものであった。また、両者を接近させた社会的条件や思想的潮流について調べ、いかなるコンテクス

トのなかでファシスト・モダニズムが生じたのか、重層的に解明することを目指した。

(3) 着想の経緯

申請者は博士論文（2008年提出）でファシズムとモダニズムの連関を明らかにするという課題に取り組んだ（『現実の神話化—ファシスト・モダニズムの理論』）。しかしながら、ファシズムのイデオロギーをはじめ、調査に不十分な点があったため、その後本テーマの研究を継続していた。

2. 研究の目的

(1) A. ボイムラー、A. ローゼンベルクといったファシズムの思想家の著作や文献を調査・研究し、ファシズムに内在する美学とモダニズムのそれとを比較対照し、その類似点と相違点を明らかにする。

(2) 政治と美学についての近年の研究や現代における芸術と政治の関係を手掛かりにしながら、ファシスト・モダニズムの現象について解釈を試みる。

(3) 表現主義など当時の芸術思潮や生の哲学（とくにニーチェ）をはじめとする非合理主義の潮流、社会的状況との関係について調査研究し、ファシスト・モダニズム成立の背景について明らかにする。

3. 研究の方法

【2010年度】

(1) ファシズムの美学思想に関する資料収集と研究・・・ナチズム美学の形成と実際の文化政策に携わったA. ボイムラーの美学的思想に関する資料を収集するとともに解釈を行った。2月にベルリンで開催された「ヒトラーとドイツの人々」展を訪れ、ファシズムのイメージ形成とその背景にあった社会的条件について調査を行った。

(2) ファシスト・モダニズムに関する資料収集と分析・・・ゴットフリート・ベン、ホーフマンスタール、エルンスト・ユンガーに関する文献資料を収集した。

(3) 現代における芸術と政治の連関に関する調査・研究・・・近年制作された戦争映画の表象とその背景にある政治的言説の関係についてまとめた。また、ベルリンに点在する記憶芸術の作品について考察した。さらに、政治と芸術というテーマに関わる複数のシンポジウムに参加し、情報収集を行った。

(4) 研究成果の公開・・・最終年度にまとめ

る報告の準備段階として、申請者が所属する学会で、研究の進展に応じて随時研究成果を発表した（5. 主な発表論文等の〔学会発表〕欄①②③に相当）。

【2011年度】

(1) ファシズムの美学思想に関する資料収集と研究・・・ナチスのイデオロギーであったA. ローゼンベルクの美学・政治思想について調査・研究を行った。

(2) ファシスト・モダニズムに関する資料収集と分析・・・ホーフマンスタールとエルンスト・ユンガーについて調査・分析を行い、Gestalt という観点からナチズムの思想との関連について考察した。ゴットフリート・ベンの詩作と政治の関係について調査・研究を行った。

(3) 現代における芸術と政治の連関に関する調査・研究・・・8月に沖縄を訪れ、記念碑の表象における芸術と政治との関係について調査を行った。また、11月にはベルリンを訪れ、ホロコーストの記憶と表象に取り組みアート作品やアーカイヴについて調査を行った。

(4) 研究成果の公開・・・前年に行った学会発表や調査の結果を論文等にまとめ、公表した（5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕①③および〔図書〕①に相当）。

【2012年度】

(1) 2010年度および2011年度の課題(1)(2)(3)を継続した。とくにドイツの保守革命など原ファシズムの思想と運動の本質を明らかにするべく調査・研究を行った。

(2) 調査研究内容のまとめと公表・・・2010年から取り組んできた研究の成果をまとめるべく著書の執筆に注力し、原稿を完成させた。著書は2013年9月に慶応義塾大学出版会より出版される予定である〔図書②に相当〕。また、博士論文でも論じたT.E.Hulmeの美学と政治の関係について論文（英文）を執筆した。（5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕②に相当）。

(3) 現代における芸術と政治の連関に関する調査・研究・・・ドイツのカッセルで開催された<ドクメンタ 13>を訪れ、政治との関連に着目して新しいアートの動向を調査し、今日におけるアートと政治の関係について考察した。

4. 研究成果

(1) ナチズムの美学思想の解明

ナチズムの文化政策に携わり、ナチズムの美学を言説化すると同時にその美学観の形成に大きな影響を与えたと考えられるA. ボイムラー(Alfred Baeumler)、A. ローゼンベルク(Alfred Rosenberg)の著作、および原ファシズムとしての保守革命運動について研究し、ファシズムの美学思想の本質を明らかにした。

① A. ボイムラーについて

ボイムラーの著書 *Nietzsche: der Philosoph und Politiker* (『ニーチェ—哲学者そして政治家』) および *Ästhetik* (『美学』) を主な手がかりとして、ボイムラーの美学思想の核心を明らかにするべく努めた。その結果として、ボイムラーがニーチェの哲学における「力への意志」を現実秩序を与える意志とみなして国家権力を擁護するものと解釈し、さらにニーチェの美的仮象による救済を「最高の形態」としての国家の形成へと読み替えたことを指摘した。さらに、ボイムラーの歴史観および芸術観をバルト的「神話」の幻惑関連をさらに強めた「占星術的」歴史観・芸術観として特徴づけた。

② A. ローゼンベルクについて

ローゼンベルクの主著 *Der Mythos des 20. Jahrhunderts* (『二十世紀の神話』) を主たる研究対象として、ローゼンベルクの美学思想の解明に努めた。その結果、彼の世界観が種、芸術、国家という三つの柱から成っており、それらの存在が有機的全体性として形姿(Gestalt)のもとに基礎づけられている点を指摘しえた。

③ 保守革命運動について

保守革命運動について、本研究においてはとくにエルンスト・ユンガーの思想および多数の二次文献を手がかりにその本質を明らかにしようと試みた。ユンガーの政治思想における関心は、労働者の形姿(Gestalt)を、「世界の諸形式を絶対的に規定する偉大さとして、可視化すること」にあり、保守革命運動の核心もまた政治的革新が生成変化する有機体かつ統合体、すなわち Gestalt をイメージさせ、かつ実現する点にあったことを指摘した。

以上①,②,③を通じて、ナチズムの美学の核心に形姿(Gestalt)という概念があり、この概念において美学と政治が連携していることが明らかになった。

(2) ファシスト・モダニズムの理論的解明

本課題研究においては、博士論文の研究対象の一つであったゴットフリート・ベンについてさらに調査と研究を進めるほか、あらたにホーフマンスタール、エルンスト・ユンガーについて研究を行い、彼らがどのような点で保守革命運動およびナチズムに関心を持ち、惹きつけられたのかを明らかにしようと試み、ある見解を得た。さらに、彼らの「形式」に対する理解のあり方から、フォーマリズムから解釈されるモダニズムとは異なるモダニズムの存在を示すことができた。

① ゴットフリート・ベンについて

ベンが多大な興味を向けたニーチェに対する関心の中心には「形式」によるニヒリズムの克服があった。このベンにおける「形式」の要求は、美的次元に留まらず政治的次元へと越境していくものであったことを指摘した。また、ベンの詩作における根源的・神話的層の探求は、芸術の絶対化とそれによる歴史の照射へと繋がった。このニーチェ理解および詩作における原型の模索と歴史への反射にボイムラーとの共通点が認められる点を指摘した。

② ホーフマンスタールについて

ホーフマンスタールの小説およびエッセイを中心に解釈を試み、言語と精神の崩壊の危機を芸術の Gestalt を取り戻すことによって乗り越えようとしたことを示した。また、この芸術上の要求が世界大戦期の危機的状況のなか政治上の要求へと拡大し、両者が重なった場所に「保守革命」への期待があったことを示した。

③ エルンスト・ユンガーについて

ユンガーのエッセイを研究し、労働者の姿に求められた Gestalt がより広い領域へと拡張され、見事に構築された全体性としての芸術作品のあり方においても認められていたことを確認した。

①,②,③によって、ファシスト・モダニズムの芸術観において、「形式」の要求はすなわち形姿(Gestalt)の要求であることを明らかにした。そして、そこにナチズムあるいは保守革命への通路があったことを指摘することができた。

(3) 現代における政治と芸術の関係性の理解

本研究期間中、カッセル・ベルリン(ドイツ)などを訪れ、政治的なテーマと関わる現代アートの作品を見聞し、今日、政治と芸術の関係が変化しつつあることを確認した。それらと比較対照することによって、ファシスト・モダニズムにおける政治への態度の特質を、

より明確に把握することができた。また、歴史や記憶など多角的観点から研究することを通して、現在における政治と芸術の新たな関係性について理解する手掛かりを得た。

(4) 今後の課題と展望

今回の調査研究では、当初の研究計画に挙げたイタリア・ファシズムの美学者（G. ジェンティール）に関する研究を行うことができなかった。また、ナチズムのイデオログの芸術観に関する調査もいまだ不十分である。これらは今後の課題とし、引き続きファシズムとモダニズムの関係について考察を深めたい。また、今回の調査を通じて、現代におけるアートへの政治への関わり方について知見を得ることができたが、今後はジャック・ランシエールなどによる近年の美学的考察を手掛かりとしながら、それを明確化することに努めたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① ISHIDA Keiko, T.E.Hulme's Aesthetics and the Ideology of Proto-fascism, *Aesthetics* (The Japanese Society for Aesthetics)、査読有、17 巻、2013、1-12 http://www.bigakukai.jp/aesthetics_online/index_en/index_en.html

② 石田圭子、ゴットフリート・ベンとアルフレート・ボイムラー—「占星術的」芸術観とナチズム—、実践女子大学文学部美学美術史学科紀要、査読有、26 巻、2012、65-77

③ 石田圭子、力の場としての「ファシズムの芸術」：鯖江秀樹『イタリア・ファシズムの芸術政治』書評、表象（表象文化論学会編）、査読無、6 号、2012、262-266

④ 石田圭子＜ヒトラーとドイツ人：民族共同体と犯罪＞展：展評、カリスタ（東京芸術大学美術学部美学研究室編）、査読有、17 号、2012、1-9

〔学会発表〕（計 3 件）

① 石田圭子、＜場所＞と記憶—記憶芸術（Gedächtnis-Kunst）の場所をめぐる—、第 5 回表象文化論学会、2010 年 11 月 13 日、東京大学

② 石田圭子、ゴットフリート・ベンとアルフレート・ボイムラー—神話的芸術観とナチズム、第 60 回美学会全国大会、2010 年 10 月 9 日、関西学院大学

③ 石田圭子、Japanese war films and recent political discourse in Japan, 第 16 回国際美学会、2010 年 8 月 13 日、中国、北京大学

〔図書〕（計 2 件）

① 石田圭子、慶應義塾大学出版会、美学から政治へ（仮題）、2013 年 9 月出版（確定）、239（予定）

② 石田圭子、他、御茶水書房、批評理論と社会理論：アイステーシス、2011 年、244

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 圭子 (ISHIDA KEIKO)
東京芸術大学・美術学部・講師
研究者番号：40529947